

第二章

生物

第一節 野生動物

町域は、犬山扇状地に位置するため平坦な地形で、現在は土地開発が進み原生的な自然環境はほとんど残されていない。

残されている主な自然環境といえば、五条川や合瀬川あいせなどの河川とその周辺に広がる河川敷・水田・用水路などの水辺環境や、畑地・雑木林・竹やぶ・社寺林・五条川沿いの桜並木といった緑地空間に限られる。

しかし、これらの自然環境は町内に生息する野生動物にとっての貴重な生活空間であり、そこには今でも数多くの野生動物が生息している。広大な山林や河川、湿地など原生的な自然環境を有する地域に比べれば生息する動物の数や種類は少ないかもしれないが、なかには絶滅危惧種や希

少種など、生物多様性の保全において重要な位置づけにある動物も数種確認できる。一方で、近年は人為的に国内外から町内に持ち込まれたり、侵入したりして定着した外来種も増加傾向にあり、農業被害や生態系のかく乱などが懸念され、その駆除や対策などが課題となっている。

ここでは、町内で確認できた野生動物のうち、よく見られる種や、絶滅危惧種、注意すべき外来種などを数種とりあげてそれぞれの特徴を紹介する。

これらは二〇一一（平成二十三）年四月から二〇二二（令和四）年十二月の間に、現地での観察・聞き取り・交通事故死した個体の回収などの方法により調査・記録したもので、ここで紹介しきれなかった種も含めて、巻末資料に種類ごとにまとめて掲載した。

哺乳類

町内で見られる哺乳類は九科二三種で、タヌキ・キツネ・イタチなどの食肉目（ネコ目）が主に見られ、外来種では北アメリカ原産のアライグマや中国から東南アジア原産のハクビシンなども生息している。

タヌキ 北海道から九州まで広く分布し、広葉樹林・針葉樹林・農地・市街地・都市化が進行した地域などさまざまな環境に適応して生息している。夜行性で雑食性であり、鳥類やノネズミ類などの小型動物・昆虫・野生果実類などを採食する。尾はふさふさし、四肢が短くずんぐりとした体形をしている。

一九七二（昭和四十七）年に余野地区の休耕田でタヌキの親子とキツネの親子が地元住民により目撃されており、新聞で紹介されている（第一編第二章第二節）。尾張平野部では、一九四五～五五年頃にタヌキとキツネは絶滅した



1-2-1 タヌキ

といわれ、その姿が住宅地で見られることは当時でもかなり珍しい事例であった。町内では住宅地でもたびたび姿を現すことがあり、畑や人家の周りに現れてエサを探したり（1-2-1）、交通事故に遭遇して死亡していたりする姿が見られる。タヌキは驚くとその場でうずくまってしまう習性があるため、自動車が近づいても逃げ出さずそのまま交通事故死する個体が多い。町内では、調査期間中に河北・外坪・奈良子・二ツ屋・替地・大屋敷・秋田地区で計一三個体が回収されている。

キツネ 都市郊外から山岳地まで様々な環境に生息するが、主には森林と畑地が混在する田園環境を好む。食性は多様であり、ノネズミ類・鳥類・大型のコガネムシ類など主に小型動物・果実・人家から出されるごみなどを食べる場合もある。町内では、近年になりタヌキほどではないが姿が見られるようになり、余野・



1-2-2 キツネ

河北・竹田・秋田・丸地区などで道路・緑地・田畑を横切る姿が住民により目撃されている。二〇一一年十二月には、河北地区で食物がなかったのか、柿を食べたり、畑で穴掘りをしたりする姿が写真におさめられている(1-2-2)。二〇一八年四月五日に大屋敷一丁目地内の道路上で雄の成獣が交通事故死に遭っていた。

ニホンアナグマ イタチ科のなかでも土を掘る方向に進化したアナグマは、前肢が大きく発達し、鋭い爪のある大きな前足を有する。雑食性で土壌動物や小動物、果実類などを主に捕食する。三河地方を中心として分布が確認されており、尾張地方での分布情報は少なく、犬山市・小牧市(東部の山地)・春日井市・名古屋市(緑区鳴海町)・知多市(北浜町)にとどまっている。

二〇二〇年四月に町内城屋敷二丁目地内の道路上で交通事故に遭っていた。当初はハクビシンとして個体が回収されていたが、確認をしたところニホンアナグマ成獣の雌であった。町での過去の生息確認記録や事故死体回収記録はなく、本種が確認できた初記録となる。

シベリアイタチ イタチは町内の広範囲の地域で見られるが、イタチといっても、外来種のシベリアイタチ(1-2-3)と在来種のニホンイタチの二種類が生息している。シベリアイタチは、東アジアに広く分布する種であるが、日本では対馬のみに自然分布する。朝鮮半島由来の個体の子孫が外来種として西日本から中部地方にかけての都市部を中心に生息している。町に定着した年代は不明であるが、一九七七年に安城市で、一九八〇年に名古屋市で本種が確認されている。ニホンイタチとは外見がとも似ていて、尾と胴体の比率や頬から耳にかけての毛色の違いなどで種の判断をおこなうが、性別・季節・成長段階によって変化する形質もあるため、識別には複数の形質を用いて総合的に判断する必要がある。しかし、両種ともに俊敏に動き回り、路上や畑地・水田などを一瞬で通過していくことがあるので、肉眼での種の判別は難しい。町では、調査期間中に河北・大屋敷・丸・下小口・余野地区で計八個体の交通事故死した個体が



1-2-3 シベリアイタチ

回収されている。住宅の屋根裏に住み着いたり、ごみ箱をあさったりする姿も目撃されている。

ニホンイタチ 日本固有種で、低地から山地までの様々な環境で見られ、泳ぎが得意で、水辺に生息する甲殻類・昆虫・魚類・は虫類・両生類を採食するが、鳥類やその卵・ネズミ類もよく食べる。

本種は、西日本や関東地方の都市部など自然分布地域の一部では個体数が減少していると考えられている。その原因としては、都市化および体のサイズが大きい近縁種シベリアイタチの分布拡大が原因として挙げられているが、実際の生息状況はほとんど把握されていない。町内では、二〇一六年（1-2-4）と二〇二一年の二例のみ河北地区の水路内で観察することができた。交通事故死した個体が確認されたのは、河北地区で一個体、竹田地区で一個体の二例のみにとどまる。町内での両種の生息割合は不明であるが、回収された交



1-2-4 ニホンイタチ

交通事故死した個体の内訳でいうと、シベリアイタチの方が圧倒的に多い。

鳥類

町内で見られる鳥類は二四科四八種で、主な種を観察地別に一覧としてまとめた（1-2-5）。

場 所	名 称
河川・水田などの水辺	オシドリ、マガモ、カルガモ、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、ケリ、コチドリ、オオジシギ、タシギ、クサシギ、タカブシギ、タマシギ、カワセミ
都市部・公園	ドバト（カワラバト）、キジバト、アオバト、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、メボソムシクイ、メジロ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、オオルリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ
畑地・雑木林・社寺林	キジ、トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、オオコノハズク、チョウゲンボウ、モズ、トラツグミ、シロハラ

1-2-5 町内で見られる野鳥一覧（観察地別）

チョウゲンボウ ハヤブサ科の鳥で、農耕地・河川敷の草地・埋立地などの荒地に生息する。主にハタネズミなどの小型哺乳類のほか、小鳥類・昆虫類・両生類・は虫類なども捕食する。町北部にあるごみ焼却処理場の江南丹羽環境管理組合環境美化センターの建屋を二〇一七年四月から一年ほどねぐらや生活拠点として利用していた(1-2-6)。また、大口町役場周辺(下小口地区)上空を飛翔しているところ(1-2-7)も目撃されており、餌となる小動物がいる見晴らしの良い農耕地が多い地域でたびたび目撃される。



1-2-6
チョウゲンボウ



1-2-7
町役場上空を飛翔する
チョウゲンボウ

オオタカ 平地から山地の林、農耕地などに生息し、近年は市街地の公園や社寺林などで繁殖する例もある。鳥類のほか小動物やウサギやテンなども捕食する。町の北部地域では、飛翔している姿や、農耕地や緑地などにおいて

バトやサギ類を捕食しているところが見られる(1-2-8)。

タマシギ 環境省・愛知県ともに絶滅危惧種に指定されている種で、平野部の淡水湿地、主に水田で繁殖するが、繁殖場所としてある程度の面積のある水田を必要とする。夜間に人工光や騒音の少ない環境が必要で、都市化や道路建設により生息に適した環境が消失し続けており、近年急激に生息数が減少している。秋田地区で、姿が目撃されている。

は虫類・両生類

大口町は、水田や農業水路などの水辺環境が多い地域なので、水辺に依存する種類が多く確認できる。

町内で見られるは虫類は一二種で、両生類は四種である。



1-2-8 ハトを捕食するオオタカ

ニホンイシガメ 日本固有種で、国内では、本州中部から西部にかけての地域・四国・九州に分布する。水生昆虫や甲殻類などを食べる（1-2-9）。環境省・愛知県では準絶滅危惧種として評価されており、生息適地の喪失、外来動物による捕食や生活の圧迫などにより個体数の減少が懸念されている。県内では、尾張東部丘陵から三河地方・渥美半島・知多半島に分布し、濃尾平野の低地部にはほとんどいないが、小さな個体群がいくつかある。町では、五条川・合瀬川といった河川や水路などで泳いでいる姿がまれに見られ、二〇一一年十一月には用水路で幼体が捕獲されている（1-2-10）。一方、河川・水路などで見かけるカメとしては外来種のミシシッピアカミミガメが圧倒的に多く、晴天の日には、五条川・合瀬川



1-2-9 ニホンイシガメ



1-2-10 ニホンイシガメの幼体

などの護岸や中州などで複数個体が集まり甲羅干しをしているところが頻繁に目撃されている。

ヤマカガシ 日本固有種で、顎の後ろに毒腺を持ち、この毒とは別に頸部の皮膚の下にも毒腺を持つヘビである。かつては水田に多いカエル食の代表格であったが、農薬の使用や餌となるカエル類の減少、土地改良による乾田化、交通事故などで県内の減少傾向は顕著であり、平野部ではほとんど目にするのがなくなってしまった。町内では、河北地区の水田やその周辺の合瀬川の河川敷などで確認することができた（1-2-11）。その他有毒ヘビでは、ニホンマムシも同じ地域で生息を確認している。



1-2-11 ヤマカガシ

ナゴヤダルマガエル 町内の水田やその周辺の水辺環境で見かけることができる。日本固有種で東海から近畿、中国地方に分布する。生息地である水辺環境の減少・喪失によ

り絶滅が懸念されており、環境省・愛知県によつて絶滅危惧種として指定されている。トノサマガエルよりずんぐりした体型である。本種は水辺からはなれない傾向が強く、一生を通じて低湿地で生活する。

土地開発や住宅開発により湿地・水田といった貴重な水辺環境が喪失し生息地が減少してしまうと、これらの絶滅危惧種に限らず、水辺環境に依存している多くの在来のは虫類・両生類は今後、絶滅の恐れがある。

魚類

大口町北部地域の五条川と合瀬川、その周辺の農業水路・水田・湿地などで確認できた魚類などを一覧として示した(1-2-12)。魚類は、二二種で、コイ・ギンブナ・オイカワ・ヌマムツ・タモロコ・ドジョウ・ナマズなどは普通によく見られるが、ヤリタナゴ・カワバタモロコ・カワヒガイ・ニホンウナギ・ミナミメダカは五条川で単体又は数個体のみ生息が確認できただけで、現在よく見られる種とはいえず詳しい生息状況については不明である。外来種では、オオクチバス・ブルーギル・カダヤシ・カムルチーが見られる。

種 類	名 称
魚 類	コイ、ギンブナ、ヤリタナゴ、カワバタモロコ、オイカワ(シラハエ)、ヌマムツ、モツゴ、カワヒガイ、タモロコ、カマツカ、ドジョウ、トウカイコガタスジシマドジョウ、ナマズ、カダヤシ、ミナミメダカ、ブルーギル、オオクチバス、ヌマチチブ、カワヨシノボリ、カムルチー、ニホンウナギ
貝 類	スクミリンゴガイ、マルタニシ、ヒメタニシ、マツカサガイ、カワニナ、マシジミ、タイワンシジミ、トンガリササノハガイ
その他水生生物	チスイビル、ウマビル、ミナミヌマエビ、スジエビ、アメリカザリガニ、モクズガニ、ミズムシ、カイエビ、カブトエビ類、ハウネンエビ

1-2-12 町内で見られる魚類・貝類・その他水生生物一覧

トウカイコガタスジシマドジョウ町内では、水田周辺の水路内のサラサラとした砂地に生息している(1-2-13)。オスの体長は5cm・メスは7cmで東海地方(静岡西部と愛知県・岐阜県・三重県の伊勢湾流入河川のみ)に分布し、ため池やそれにつながる水路、水田地



1-2-13 トウカイコガタスジシマドジョウ

帯の河川に生息する。丘陵地から平野部の水田地帯に広く生息していたと考えられるが、生息地の開発、水質の悪化などにより絶滅の危険性が極めて高い。

カムルチー 通称「ライギョ」と呼ばれる。大型の肉食魚であり、魚類・両生類・哺乳類などを捕食する。日本へは朝鮮半島及び中国大陸などから一九二〇年代頃持ち込まれた。町民の話では、一九五〇年代頃の町内のため池ではよく見られたというが、現在ではほとんど見かけることがなく、五条川でまれに姿を見かける程度である。本種のほかにタイワンドジョウやコウタイなどのタイワンドジョウ科の魚も「ライギョ」と呼ばれるが、カムルチー以外の種の生息は県内では報告されていない。

貝類

水田や水路内において、在来種では、マルタニシ・ヒメタニシ・マシジミが、そして外来種ではスクミリンゴガイ、タイワンシジミが多く見られ、また一部の水路では数は少ないが、マツカサガイ・トンガリササノハガイなどの在来性の希少な二枚貝が確認できた。

スクミリンゴガイ 南米原産で一九八〇年代頃に食用のためアジア各国に持ち込まれた。通称ジャンボタニシと呼ばれ、流れの緩やかな水路・細流・湖沼・水田など比較的水温が上がりやすい淡水域を好むようである。町内の水田や水路に大繁殖しており、産卵期には、ピンク色の卵塊が水田・水路内の壁面、稲穂など陸場のいたるところに産みつけられている(1-2-14)。本種が県内に移入・定着したのは、一九八五年頃だと考えられているが、町内で見られるようになった正確な年代は不明である。



1-2-14 スクミリンゴガイの卵塊

昆虫類

昆虫類は全体の種数が多く、県内だけでも記録種は、二九目五二二科一万四四三種となる。体が小さく様々な自然環境に生息しているので、その全体数を把握するためには十分な人員・経費・期間・機材なども確保し、各昆虫の生

態や生息環境などに合わせた調査方法を実施する必要がある。そのため、河北地区の北部地域周辺にある自然環境（五条川・合瀬川の河川敷・水田の畔・畑地・休耕田・緑地・土中・雑木林など）を中心にしてフィールドワークを主として昆虫調査をおこなった。また、今回の調査した地域内ではないが、町内の特定の竹やぶにおいてヒメボタルが生息しているのも、それについても紹介する。

調査の結果、八目五九科一四〇種の昆虫が確認できたが、種数が多いため、主な昆虫を種類別にまとめた（1-2-15）。河川敷や土手などでは、キタキチョウ・キタテハ・ツマグロヒョウモン・ニホンミツバチ・セイヨウミツバチ・タイワンタケクマバチ・ウスバキトンボ・シオカラトンボなどが、草地では、オンブバッタ・エンマコオロギ・トノサマバッタが、水田・水路内では、アメンボ・ヒメガムシ・ハイイロゲンゴロウなどの水生昆虫が見られた。また、雑木林内の樹木には、カブトムシ・コクワガタ・カナブンなどが樹液を求めて集まり、樹木の根本や落葉などが堆積した腐葉土中などには、センチコガネ・ゴミムシの仲間など徘徊性の昆虫が見られた。

目名	科・種数	主な昆虫
トンボ目	5科8種	ハグロトンボ、アジアイトトンボ、ギンヤンマ、ナツアカネ、アキアカネ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ
バッタ目	6科12種	エンマコオロギ、ケラ、クサキリ、クビキリギリス、ツユムシ、トノサマバッタ、オンブバッタ、ツチイナゴなど
カマキリ目	1科4種	コカマキリ、オオカマキリ、カマキリ、ハラビロカマキリ、ムネアカハラビロカマキリ
カメムシ目	11科22種	ニイニイゼミ、クマゼミ、コオイムシ、マツモムシ、シマアメンボ、アカシマサシガメ、キマダラカメムシ、アカスジカメムシなど
コウチュウ目	16科47種	アトワアオゴミムシ、ハイイロゲンゴロウ、ヒメガムシ、コクワガタ、カブトムシ、ヤマトタマムシ、アオドウガネ、キボシカミキリなど
ハエ目	5科7種	アオメアブ、ホソヒラタアブ、シマアシブトハナアブ、ミスジミバエ、メスアカケバエなど
チョウ目 チョウ類	4科15種	アオスジアゲハ、アゲハ、ミヤマカラスアゲハ、キタキチョウ、キタテハ、ツマグロヒョウモン、ゴマダラチョウ、ヤマトシジミなど
チョウ目ガ類	5科7種	ホタルガ、カノコガ、シロヒトリ、クロホウジャクなど
ハチ目	6科18種	クロアナバチ、オオセイボウ、フタモンアシナガバチ、コガタスズメバチ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチ、タイワンタケクマバチなど

1-2-15 町内で見られる主な昆虫類

ツマグロヒョウモン タテハチョウ科に分類されるチョウの一種である。南方系のチョウで世代を重ねながら生息域が北上し、一九九〇年代に県西部で記録が増すようになり、数年後には県内の広範囲で見られるようになった。幼虫は、パンジーをはじめ園芸品種のスミレ類を広く食することから、これらの栽培地域の拡大や地球温暖化による冬季の最低気温上昇などによって生息域が拡大していると考えられている。本種は、調査地に限らず町内のいたるところで確認できる。

タイワンタケクマバチ

ミツバチ科に属するハナバチ類の一種である（1-2-16）。体長は二二mm〜二八mmで、竹の中に穴を作って幼虫を

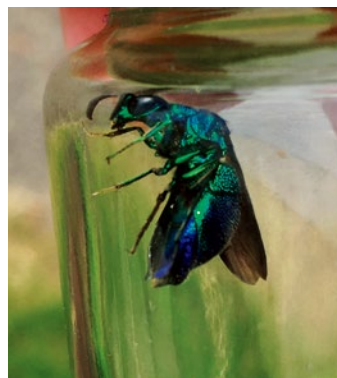


1-2-16
タイワンタケクマバチ

育てる。中国産の輸入竹から侵入したと考えられている。県内では、二〇〇六年の発見以来、急速に拡大しており、在来種のキムネクマバチやその他の花粉を利用する昆虫との競合や竹材活用に影響を及ぼす懸念がある。調査地では、

五条川や合瀬川河川敷、緑地帯などで確認できた。

オオセイボウ セイボウ科に分類される寄生蜂（昆虫の体内に寄生するハチ）の一種である（1-2-17）。体長は七mm〜二十mmで色彩は変化に富み、紫薫色から青緑色、頭部及び体側部は緑金色になる個体もある。花にやってくる。幼虫はスズバチ・トックリバチなどの巣に寄生して育つ。五条川の河川敷の草地周辺を飛翔していた。



1-2-17 オオセイボウ

キマダラカメムシ カメムシ科に分類されるカメムシの一種。台湾から東南アジア原産の帰化種で、サクラ・カキなどの樹木に寄生する。近年分布が急速に北上・拡大しており、県内では二〇一一年に名古屋市瑞穂区で最初に確認された。他地域から持ち込まれた植栽樹と共に持ち込まれたのではないかと考えられている。

コオイムシ コオイムシ科に分類されるカメムシの一種で、体長は一七mm〜二〇mmで、体は扁平^{へんぺい}で卵型である。巻き貝や昆虫類を食べる。名前の通り、メスがオスの背中に卵を産み付け、オスが背中に卵を背負って孵化するまで守る。水草の多い溜^ため池、水田地帯の素掘りの水路、休耕田や湿地の浅い水たまり、河川のワンドなどに生息する。環境省の準絶滅危惧種に指定されているが、県内では、比較的産地・個体数は多い。

ヒメボタル ホタル科に分類されるコウチュウの一種である(1—2—18)。今回の調査対象地域ではないが、町内の特定の竹やぶで見られる。ゲンジボタルやヘイケボタルと違い、成虫・幼虫ともに陸上で生活するホタルであり、小型(五・五mm〜九・五mm)だが光は強く金色に短く点滅する。

町内では、竹やぶ内を毎年五月中旬頃、一週間程度の短期間に発光しながら飛んでいる姿を見ることが出来る。地元住民の話では、年々飛翔している個体数が減少傾向にあるとのことである。土地開発による、竹やぶの減少や街路灯の整備などの都市化により、生息地の周辺環境が変化し

たことがその一因ではないかと思われる。なお、確認場所は生息地保全の観点から非公開としている。

また、町内では、ヒメボタルの他に、かつて木津用水をはじめ町内の河川などではゲンジボタルやヘイケボタルが飛翔している姿が目撃されていたが、二〇二三年現在両種ともに野生下での生息は確認できない。



1-2-19 ヒメボタル (腹側)



1-2-18 ヒメボタル

第二節 町民が残した野生動物の記録

町民が町内の野生動物に関心をもち、積極的に記録を残した事例や、町民が野生動物とのかかわりや当時の風景などの記憶をコラム形式でまとめた事例などを紹介する。

「丹羽郡大口村大字余野周辺採集昆虫写生図」(近藤豊治氏作)

余野地区在住だった近藤豊治氏(一九二五～二〇一八年)は、一九四八(昭和二十三)年の夏に、養蚕や田の草取りをする昼休みの合間に、採取した昆虫を標本化し、それを一枚の絵画(横一〇一cm×縦七一cm)として描き上げた。

「丹羽郡大口村大字余野周辺採集昆虫写生図」と題され、チョウ類をはじめ一〇三個体の昆虫が原寸大で精緻に描かれている(1-2-20)。

内訳としては、チョウ・ガ類が三六個体、コウチュウ類(カブトムシ・クワガタムシ・カミキリムシ・ホタルなどの仲間)が三六個体、ハチ類が一三個体、トンボ類が一〇個体、ハエ類が五個体、カメムシ類(セミ)が三個体である。



1-2-20 「丹羽郡大口村大字余野周辺採集昆虫写生図」(大口町教育委員会所蔵)

カブトムシ・ノコギリクワガタ・ゴマダラカミキリ・ナミアゲハ・オオスズメバチ・アブラゼミ・シオカラトンボなど、描かれている昆虫の多くは現在でも県内で一般的に見られる昆虫である。

しかし、下方にコウチュウ類の一種で「キベリマルクビゴミムシ」(1-2-21)と呼ばれる昆虫が描かれており、この昆虫は『レッドデータブックあいち2020—動物編—』において絶滅危惧ⅠA類(ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高いもの)として評価されている。そして、「この五十年ほどの間、生息情報もたらされておらず、す



1-2-21 キベリマルクビゴミムシ



1-2-22 ゲンジボタル

でに絶滅している可能性が高い」との指摘もある。県内では庄内川河川敷、名古屋市内各地などで採集記録が残されている。かつては平野部において普通に見られたが、以降県内では生息が確認されていない希少な昆虫であり、絵画が制作された一九四八年時点では、余野地区に本種が生息していたと思われる。

そのほかにも、ヘイケボタル・ゲンジボタル(1-2-22)など、町内において野生では見られなくなった昆虫も描かれており、当時の余野地区に生息している昆虫層を知る上で貴重な絵画であるといえる。

一〇三個体中八七個体の昆虫の種名を特定したが、一六個体(チョウ類三個体、ガ類二個体、コウチュウ類二個体、ハチ類二個体、トンボ類二個体、ハエ類五個体)は、形態や模様以外に、裏側の模様や、体内にある諸器官を調べるなどしなければ種の特定は難しい。

この絵画は、近藤氏の没後、二〇一八(平成三十)年十一月二十一日に遺族によって町へ寄付され、二〇二三(令和五)年現在、大口町中央公民館二階廊下に展示されている。

『余野のタヌキ ポン子とポン太』（近藤俊夫氏作）

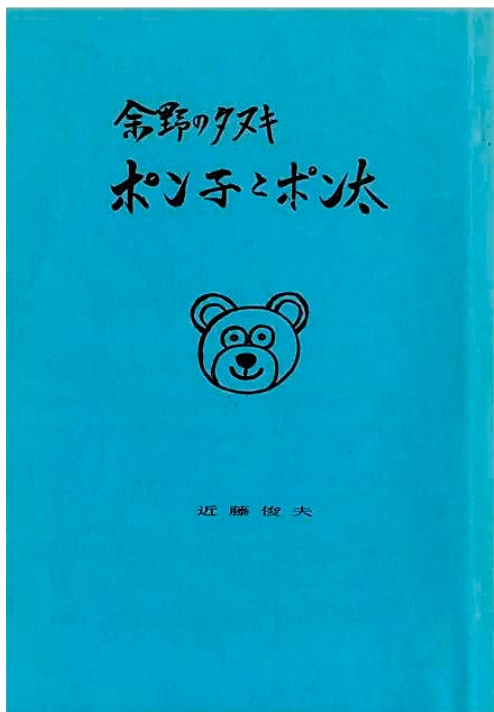
余野地区在住だった近藤俊夫氏（一九二五～二〇一七年）は、地元の休耕田において野生のホンドギツネやホンドタヌキを撮影することに成功した（1-2-23・24）。

その写真は、中日新聞（一九八七年七月二十九日尾張版七頁）に「タヌキの親子連れ 執念で撮影成功」との見出しで紹介され、撮影に至る経緯も含めて詳しく掲載されている。

また、近藤氏はその写真を使用して『余野のタヌキ ポン子とポン太』（1-2-25）という本を制作した。

この絵本では、タヌキをポン子とポン太と名付け、子育てから、この地を去っていくまでの数か月間について、撮影した写真をもとに、「おじさん」と「ポン子」「ポン太」の出会いから別れまでを物語として書いている。文章を自ら執筆し、写真を直接貼り付けた手作りの本は、町内の小学校に教材として提供され、大口町教育委員会にも保管されている。

これらの写真や絵本は、当時の余野地区に生息していたタヌキやキツネなどの生活史や、当時の野生動物をとりまく余野地区の自然環境のあり方をうかがうことができる貴重な資料である。



1-2-25 『余野のタヌキ ポン子とポン太』



1-2-23 タヌキの兄弟（1987年撮影）



1-2-24 キツネの親子（1987年撮影）

ここでは、町民から寄せられた昔の町内の自然に関する思い出などをコラム形式で紹介する。町内ではもう見られなくなった風景や生きものなどが登場するので興味深い。

ライギョ釣りと貝とり

私の子どもの頃、昭和二十年代は、池や境川（私が住む外坪地区を流れる小川）でよく遊びました。道路を整備することが多い時代で、その横には池があつて魚がたくさんいました。子どもたちの間で人気があつたのは、ライギョ釣りで、釣り竿に、カエルの皮をむいて針に引っ掛けて池に入れると、面白いようにライギョが釣れました。家の空地で、壁土用の土を掘るので池ができて、そこに釣つたライギョをどんどん入れていきました。

父は、台湾に兵隊に行ったこともあり、ライギョを「タイワンドジョウ」と呼んでいたので、私も「タイワンドジョウ」とか「ソウギョ」と呼ぶこともありました。

秋になって「カエドリ」の時期になると、大人が魚を取った後に子どもが入ってフナやモロコを捕って持ち帰り、焼いて串に刺してからさらに干したものを祭りの押し寿司に乗せたりしましたが、ライギョは食べたことはなかったですね。

境川では、貝もよくとりました。ジョウレンやマンノを持つ

ていき、黒くて大きい「ドウビン」と呼ばれる大きな二枚貝と少し細長い感じの「カラスガイ」がよく取れました。

「カラスガイ」は、私だけだったのかもしれないが、実が薄い感じであまり人気がなかった気がします。実の大きい「ドウビン」は持ち帰って、家で味噌あえにして食べました。今では、懐かしい思い出です。

（昭和十五年生まれ）

「ライギョ釣りと貝とり」は、外坪地区の住民による一九五〇年頃の思い出話である。その住民は当時、小学生だった。「ライギョ」とは「カムルチー」（1-2-26）のことを指すと思われる（第一編第二章第一節）。

「カラスガイ」や「ドウビン」は淡水性の二枚貝である。「ドウビン」の正式名称は「ドブガイ」であり、一般的に泥臭く食用には向かないとされる。しかし、町内ではないが、水のきれいな場所で生息しているものは食べられている。



1-2-26 カムルチー（五条川）

郷愁の淡水魚

肥沃な土壌と清流が結ばれる荒井のあたりは、多様な生き物が生息していました。淡水魚の種類も豊富で、昔はヤツメウナギやアユなどを見かけました。ヤツメウナギは、目の後ろに七つのえら穴があつて口が吸盤のようになっていて面白い魚で、アユは、秋ごろ、木津用水の橋の下から群れをなして泳いでいるのが見えました。とても賢い魚で、子供のころ捕まえてようと試みても、素早く逃げてしまうので、手に負えませんでした。

浅瀬の流れが速い所では、ハゼに似た魚をよく見かけ、方言でスナクジと呼んでいました。また背中がぶつぶつで動きが鈍いダボという珍しい魚や、身体が透きとおっているように見えたシマメドジョウ、アシの茂る水辺にはヨシノボリを見かけました。また、ウシのような鳴き声をする大きなウシガエルも見かけ、人があまり近づけない清水が湧き出ているような所では、背中が黒くて腹が赤い両生類のイモリを見かけたこともありました。

ドジョウは至る所にいましたが、雨が降り「いぼれ」の水が増すと、どこから集まってくるのか一斉に「いぼれ」の流れに向かつて泳ぎ始めます。その時になると祖父は器用に竹製の「いげ」を作り、「いぼれ」に土手を築き、「いげ」を仕掛け、登る習性のあるドジョウを捕まえていました。「いげ」には「あっこ」

と呼ばれる一度魚が中に入ると再び外へ出られない工夫が施されていて、とても多くのドジョウを捕まえていたのが面白かったです。捕まえたドジョウは、料理の材料となります。ぬめりと泥臭さを取り除き、身を引き締めるため赤唐辛子をいくつかわんに放り込み、毎日、水を取り替えていました。ドジョウの料理はいろいろありますが代表的なのはドジョウ鍋で、冬瓜とドジョウを濃い味噌で煮込みネギを刻んでたべる独特の田舎料理です。寒いときにはあつたまるので大変うれしい料理でした。

(昭和十一年生まれ)

石諸子(イシモロコ)

木曾川水系で魅力的な淡水魚は「石諸子」です。形はアユに似て、成魚でもせいぜい一〇センチぐらいで川石の下に身を隠し、なかなか人目につきません。腹部に黄色い模様があつて、これが大変美しく、秋落ちの木津用水でこの石諸子を捕まえることをとても楽しみにしていました。石の下には、石諸子のほかに、アカザというグロテスクな魚も潜んでいて、アカザを私は「赤鯰」と呼んでいました。このアカザの口髭あたりに触れると蜂に刺されたような痛みが走り、こいつには大変悩まされました。

(昭和十一年生まれ)

「郷愁の淡水魚」・「石諸子」は、共に中小口地区の住民が、小学生であった一九四五年頃の生き物にまつわる思い出話である。

コラムに登場する多様な生物の中には、標準和名ではなく当時の地方名や俗称で呼ばれている種も多い。このことから、図鑑で確認し、コラムの語り手に聞き取り調査をして俗称を現在の標準和名に当てはめたところ、「スナクジ」とは「カマツカ」、「ダボ」は「ドンコ」、「シマメドジョウ」は「トウカイコガタスジシマドジョウ」、「イモリ」は「アカハライモリ」、「イシモロコ」とは「モツゴ」であることが判明した。

この二つのコラムに登場する動物をまとめると、ヤツメウナギ(スナヤツメ)・アユ・カマツカ・ドンコ・トウカイコガタスジシマドジョウ・アカハライモリ・カワヨシノボリ・ウシガエル・ドジョウ・モツゴ・アカザとなり魚類が九種、両生類が二種である。ドジョウ・トウカイコガタスジシマドジョウ・カマツカ・カワヨシノボリ・ウシガエル・モツゴは二〇二三年においても町内の河川や水田周辺の排水路などの水辺環境でよく見られる生物である。

「荒井」(1-2-27)とは、上小口地区と中小口地区の境

界部にある「荒井堰」^{せき}のことであり、ここは、かつて生き物が豊富にあつまる場所として、釣りをしたり生き物を捕まえたりする遊び場として有名であったという。

家の周りには排水としての役割のある「いぼれ」が掘っており、そこに魚が流入してくる場合がある。その際、「いげ」(「うげ」とも称す)(1-2-28)と呼ばれる漁具を用いて「いぼれ」に土手を築きその魚を捕まえて食していたということである。コラムではドジョウを捕まえて鍋にして食べたとある。

当時の荒井堰における自然環境の豊かさ、生物の多様性がこれらコラムからうかがえ



1-2-28 いげ (大口町歴史民俗資料館所蔵)



1-2-27 荒井の風景 (1960年代頃)
(大口町歴史民俗資料館所蔵)

る。なお、二〇二三（令和五）年現在の荒井堰は、常時水量が多く流れが速いので、中に入って泳いだり魚を捕まえたりすることは大変危険である（1-2-29）。

ここで、登場した魚類の一部について写真を掲載し紹介する。モツゴ（1-2-30）とカマツカ（1-2-31）は町北部地域の五条川水系で捕獲した個体で、ドンコ（1-2-32）とアカザ（1-2-33）は江南市北部地域の木曽川水系にて捕獲した個体である。



1-2-29 荒井堰（2020年8月撮影）



1-2-32 ドンコ（木曽川）



1-2-30 モツゴ（五条川）



1-2-33 アカザ（木曽川）



1-2-31 カマツカ（五条川）

ホタルの思い出

町では一九六五年頃まで、五条川や木津用水などの河川周辺で野生のゲンジボタルやヘイケボタルが見られ、捕獲・観賞がされた。麦わらで作られた「ホタル籠」(1-2-34)にホタルを捕獲して持ち帰り、寝る時に蚊帳かやをつつて、その中でホタルが光を放つて飛び交うのを楽しんだ。また、透明の瓶の中にホタルを入れて観賞していた。



1-2-34 ホタル籠
(大口町歴史民俗資料館所蔵)

ホタルの思い出

子どもの頃、五条川にもホタルがいましたが、茂みの下の方にあるホタルは、捕まえてはいけないと父に言われました。理由を尋ねると「マムシの目が光って、ホタルと見まぢがえるから」と言われました。あるいは、種の保存のための言い伝えであったのかもしれませんが。

(昭和十年生まれ)

寮に住む女工さんを誘って、木津用水にホタルを見に行く友達をうらやましく見ていました。若い時のちよつとほろ苦い思い出です。

(昭和十七年生まれ)

平成十四年の五月か六月のこと。夜、足の悪い母に付き添って歩いていると、母の肩に光るものが止まりました。母は、「ああ、ヒメボタルだ。まだいるのねえ。お父さんが、迎えに来た」とつぶやいた。その年の冬に母は亡くなりました。今となっては、母との大切な思い出です。

(昭和三十八年生まれ)

西小学校のピオトープとホタル

大口西小学校の敷地内につくったピオトープにある池に、ヘイケボタルの幼虫を入れたのは、平成十三年六月ごろだったでしょうか。近隣の住民で協力してこの活動が始められ、私もこれに賛同して一緒に汗を流してお手伝いをしました。ただ、このホタルが成虫となって飛び交うのは、うまくいったとしても翌年の夏頃ではないかと聞いていました。

ところが、夏休みに入ったころ、ピオトープでホタルが飛んでいるのが確認されたのです。どうやら池の水質が変化したこ

とでヘイケボタルの幼虫の好物であるサカマキガイが大量発生し、その結果幼虫の成長が早まったのではないかということでした。

また、ゲンジボタルも飛ばそうと計画し、ゲンジボタルの保全活動をされている御嵩町に有志で勉強に行きました。そこでゲンジボタルのエサとなるカワニナをいただき、夢中になってカワニナを育てました。やがて、六月中旬からゲンジボタルが飛び始め、そのあとにヘイケボタルも飛び始めるようになりました。ホタルは、特に蒸し暑くて風のおだやかな夜によく見られるようです。

こうして、ピオトープ内に飛び交うホタルを間近で見たり、ホタルを見に来てくれた人達とお話をしたりして楽しい時間を過ごすことができたのは貴重な思い出です。

最もうれしかったのは、子どもたちが祖父母を連れて見に来てくれたことです。お年寄りが、昔の思い出を孫に語っている姿を見て心が癒やされました。

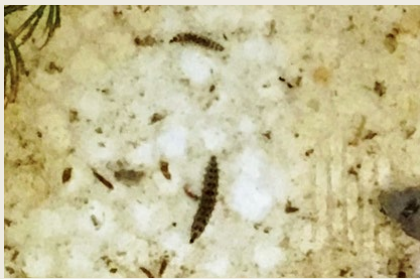
「ああ、このためにやってきた、参加してよかった」と心から思える瞬間でした。きっと、ピオトープを作り守ってきた皆さんも同じ思いだったと思います。

(昭和三十三年生まれ)

ホタルの飼育

大口町余野地区にある大口西小学校では、二〇〇一年三月から地域住民らと協力してピオトープ（生き物が集まる空間）づくりが開始された。学校内にホタルが生息できるよう、ピオトープ「西つ子の里山」を整備し、専用の飼育室にて人工飼育したヘイケボタルの幼虫（1-2-35・36）をピオトープ内の池に放流した。二〇二三年現在もホタルが生息できるピオトープづくりは続けられている。

大口西小学校で人工飼育されているヘイケボタル



1-2-35 ヘイケボタル（幼虫）



1-2-36 ヘイケボタル（成虫）

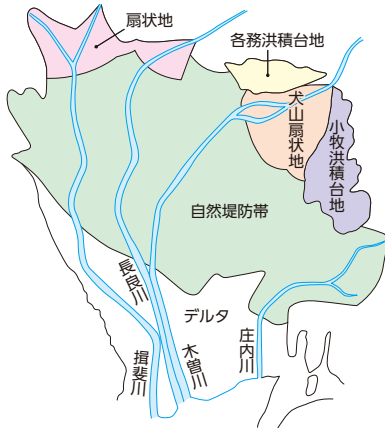
写真二点は大口西小学校より提供

第三節 植物

町が位置する濃尾平野は、ほぼ木曾川・長良川の下流部左岸から東部の丘陵地までの広大な平坦地である（1—2—37）。この地域は開発が進み、ほとんどが耕作地や住宅地であり、比較的自然度が高い箇所としては河川沿いしかない。特に木曾川の河川敷は発達し、多くの注目すべき植物が確認されている。

町内で植物を多く目にする主な場所としては、五条川をはじめとした諸河川内や河川敷とその周辺の水路・水田・農耕地などの水辺を中心とした環境や、社寺林・雑木林・竹やぶ・公園などの樹林や草地などが挙げられる。

ここでは、町内で確認できた植物



1-2-37 濃尾平野の地形
（『濃尾平野の歴史1』より作成）

のうち、主な種を数種とりあげて紹介する。これらは、二〇一九（令和元）年一月から二〇二二年十二月の間に、現地での観察・聞き取り・採集などの方法により調査・記録したもので、ここで紹介しきれなかった種も含めて、巻末資料にまとめて掲載した。

町の主な植物について

町内は土地開発が進み、多くの自然植生（その地域本来の自然環境のもとに成立している植生）が失われており、人為的な影響を受けて形成された代償植生（人間活動の影響を受けた後に成立した植生）が多い。町で見られる主な植物を1—2—38にまとめた。

河川環境の植物

五条川や合瀬川あいせなどの河川内・河川敷には、ヨシ・ジエズグマ・オギなど背丈のある湿性植物が群落（異なる植物が集まって生育しているまとまり）を形成している。また、五条川ではこれらに加えキシヨウブ・ミゾソバが、巾下川や境川ではマコモなど抽水性植物（茎や葉が水面を突き抜けて空気中に出る植物）の群落もある。また、五条川の川

場 所	植物名
河川内	ヨシ・オギ・ジュズダマ・キシヨウブ・ミゾソバ・マコモ・セキシヨウモ・オオカナダモ・ハゴロモモ・オオフサモ
河川敷	セイヨウカラシナ・セイヨウアブラナ・ヒガンバナ・エノコログサ・ベニバナツメクサ・ススキ・セイタカアワダチソウ・アレチハナガサ・ヒメジョオン・ハルジオン・ノブドウ・ナワシロイチゴ・クズ・ヤブガラシ・ヘクソカズラ・カナムグラ・ネザサ・セイバンモロコシ・チガヤ・ヨウシュヤマゴボウ・クララ・ワレモコウ
畑地・水路・水田	ヒメムカシヨモギ・メマツヨイグサ・ギシギシ・ノボロギク・シマズズメノヒエ・タチスズメノヒエ・アメリカセンダングサ・コセンダングサ・ミズハコベ・オランダガラシ・コナギ・チョウジタデ・ウキアゼナ・イスタデ・クサムネ・アオウキクサ・カラスムギ・ノチドメ・タガラシ・アレチヌシビトハギ
寺社・雑木林	ヒノキ・アラカシ・クスノキ・サカキ・シラカシ・ヒサカキ・ヤツデ・イロハモミジ・エノキ・ケヤキ・コナラ・ムクノキ
住宅地・公園・歩道	マツバウンラン・ナガミヒナゲシ・シロツメクサ・セイヨウタンポポ・オオキンケイギク・スベリヒユ・オランダミミナグサ・オッタチカタバミ・ユウゲシヨウ・ヘラオオバコ・ネジバナ・オドリコソウ・ノボロギク

1-2-38 町内で見られる主な植物一覧



1-2-39 ベニバナツメクサ (外坪)

底には、エビモ・オオカナダモ・フサジュンサイが、巾下川にはセキシヨウモ・ヤナギモ・ササバモなど沈水性植物（植物全体が水中に沈んで成長する植物）の群落がある。

諸河川の堤防沿いには、ススキ・セイタカアワダチソウ・アレチハナガサ・チガヤ・エノコログサや、クズ・ヤブガラシ・ノブドウ・ヘクソカズラなどの蔓性植物がおい茂り、春の堤防沿いにはセイヨウアブラナ・セイヨウカラシナ・ベニバナツメクサ（1-2-39）が、秋にはヒガンバナが広範囲に花を咲かせている。

畑地・水路・水田

畑地の畔道あぜみちや休耕田などには、ヒメムカシヨモギ・ギシギシ・アメリカセンダングサ・コセンダングサなどが、水路・水田内には、コナギ・チヨウジタデ・イヌタデ・ウキアゼナ・クサムネ・アオウキクサ・タガラシなどが広く見られる。

寺社・雑木林

常緑針葉高木であるヒノキをはじめ、アラカシ・クスノキ・シラカシ・サカキ・ヒサカキなどの常緑広葉高木・小高木や、エノキ・ケヤキ・コナラ・ムクノキなどの落葉広葉高木が、ある程度まとまった樹林空間を形成している。一部寺社の周辺には水田や雑草地が広がっている場所もあり、これらをあわせ、一定の緑地空間が確保されている地域もある。

住宅地・公園・歩道など

市街地では、道端・空地・人家の庭などにネジバナ・カタバミ・ミミナグサ・ホトケノザなどの在来性の雑草のほか、ナガミヒナゲシ・シロツメクサ・セイヨウタンポポ・

オオキンケイギクなどの外来性の植物などが多く見られる。

ヨシ アシともいう。湖沼やため池・河川・水路から湿原まで、いたるところの水域や湿地に最も普通に生育する多年生の抽水湿性植物で、地下茎は地中深くを横に這う。花期は八〜十月である。町内の五条川・合瀬川などの河川内・河川敷・土手沿いなどの水辺環境ではいたるところで大群落を形成している(1-2-40)。



1-2-40 ヨシ (河北)

オギ ススキによく似ている。ススキは大きな株になって叢生そうせいするが、株と株の連結はなく、オギは地下茎が横に伸び節々から茎が一本ずつ単立し連なり、大群落をつくる。ススキは乾いたところでもよく育つが、主に湿地や水辺に生育する。草丈は一〜二・五mで花期は九〜十月である。町内でも、湿地・休耕田・河川敷などの水辺環境でよく見

られる(1-2-41)。茎は丈夫で七月下旬頃に町内でおこなわれる輪くぐり(第三編第四章第二節)の材料の一つとして利用されている。



1-2-41 オギ (下小口)

マコモ オギと同じく、輪くぐりの材料の一つとして利用されている植物で、中下川や境川など一部の河川内に広く群落が見られる(1-2-42)。低地の水辺に生育する大形の多年生草本で、株の基部は水中にあることが多い。イネ科植物の中ではよく目立つ種類で、良好な低湿地環境の指標となる。大形の植物であるが、開発圧力の高い平野部の水辺に生育しているため、改修工事などにより消滅してしまうことも多い。町内の



1-2-42 マコモ (二ツ屋)

河川内でも減少傾向にあり、輪くぐりの材料として採集することが年々困難になりつつある。

エビモ 平野部の小水路などに生育する沈水性の水草で、時に止水域でも生育する。五条川内の一部や周辺の水路内などにわずかではあるが生育が確認できる(1-2-43・44)。県内の水草は全体的に水質汚濁の影響を受けて衰退しており、未だ減少傾向が認められない種も含めて、注意深く観察する必要がある。町内の自生地の周辺の流域には、キシヨウブ・フサジュンサイ・オオカナダモ・オオフサモなどの外来性水草の群落があり、水質環境の変化に加え、今後外来種との競争により自生地が侵略され減少してしまうことも懸念される。



1-2-43 エビモ (河北)



1-2-44 エビモの群落 (河北)

クララ 多年草で、原野・あき地・土手などに生育する。茎は叢生し高さは1〜1.5mになる。葉は長さ1.5〜20cmで、長楕円形〜長卵形をしており、茎から互い違いに生える。八月に茎先に淡いクリーム系の花を総状に多数つける(1-2-45)。環境の変化に敏感で、近年、全国的に著しく数を減らしている。根を舐めると目がくらむほど苦いのでクララという名がついた。この苦味は有毒である。昔は駆虫薬としてウジ殺しに使われた。町内では、五条川や合瀬川の土手沿いで所々見られる。



1-2-45 クララ (河北)

コナギ 代表的な水田雑草で、ときにため池や河川の浅水域にも生育する一年生の抽水〜湿性植物である。花は青紫色で、葉より高い位置には咲かない。葉の形は矢尻のような幅の狭いものから円心形の広いものまで極めて変化に富む(1-2-46)。いったん水田を放棄すると一面を覆い尽

くす勢いで繁殖する。町内にある水田内によく見られる雑草である。

ミスハコベ 湿田に多く、水路・河川・湖沼などにも見られる。葉の形は生育環境で著しく変化する。田んぼのような陸生や水面の浮葉は、普通へら形やしゃもじ形をしているが、水中では線形へと変化する。これとよく似た種で外来種のイケノミスハコベがあるが、これは沈水葉がすべて幅の広い楕円形であることから、ミスハコベと区別することができる。町内では、五条川周辺の流れのある一部の水路で生育が確認できている(1-2-47)。



1-2-46 コナギ (河北)



1-2-47 ミスハコベ (河北)

ワレモコウ 日当たりのよい草地に生育する多年生草本で、秋には紅紫色の楕円形の花穂をつける。スズサイコやオミナエシと共に、代表的な里草地の植物である。平野部の河川の堤防や用水路の土手などにも生育している。町内では、五条川の土手沿いで見られる。

オオキンケイギク 原産地は北アメリカで、日本には明治時代に渡来し、観賞用に栽培された。河川敷や埋立地、路傍の荒地に生息する。花期は五〜八月頃で、町内では合瀬川・五条川周辺の堤防沿いや道路沿いなどで広く群落を形成している（1-2-48）。



1-2-48 オオキンケイギク (河北)

オオフサモ 南アメリカ原産で、日本へは大正期に観賞用に持ち込まれたのが野生化したといわれる（『ブルーデータブックあいち二〇二〇』）。多年生の抽水性水草で、茎は直

径約5mmの円柱状であり、しばしば赤みを帯び、分岐しながら泥中または水中を長く進む。パロットフェザーの名で栽培されていた。密集した群落を形成して水面を覆い、他の水草の生育を妨げる。二〇二〇年頃から河北地区周辺の五条川や合瀬川内の岸辺で群落が見られるようになり、二〇二三年現在では、周辺の水田内に生育範囲を広げている（1-2-49）。



1-2-49 オオフサモ (河北)

オオカナダモ 南アメリカ原産で、日本へは大正期に渡来し、一九四〇年代から野生化したと推測されている。日本へは植物生理学の実験材料や熱帯魚飼育のための水草として導入された。アナカリスの名で観賞用水草として流通している。常緑で多年生の沈水性水草であり、水中に密集した群落をつくり、他の水草の生育を妨げる。茎は1m以上になる。町内では、五条川や巾下川などで広い群落が確認

でき、切れた茎の一部が用水路に侵入し、水底に根を張り水路内の流れをせき止めるほど繁殖している場所もある（1—2—50）。



1-2-50 オオカナダモ（河北）

ウルシに気を付けて

神社の境内は、いつの時代も子どもの遊び場です。昭和四十年代前半、「神社に遊びに行く」と母に告げると「ウルシにかぶれんように」と言われましたが、ウルシがどんなものかも知らず生返事しかしていませんでした。ある日、神社で友達と遊んでいるとお年寄りが声をかけてきました。

「ウルシに気をつけるんだよ」と。最近、散歩をするようになり、「あれはウルシかな？ 触るとひどい目に合うかな？」と思いう出すことがあります。

（昭和三十二年生まれ）

カミキリムシと桑の木

一九七〇年代頃の、私が小学生の時の話です。学校の通学路にカミキリムシがいる木があつて、行き帰りに捕まえて遊びま

した。その木の実には赤く、母に見せると「桑いちごだね」と言われた記憶があります。桑の実には赤くて形がイチゴに似ていたのでこのように呼ばれていたようです。この地方では昔から養蚕が盛んで、カイコの餌となる桑の葉を育てるために、桑畑がたくさんあつたと聞いています。

（昭和三十八年生まれ）

庭の柿の木

私の家の庭には、柿や梅の木をはじめとていろいろな木が植えてありましたが、家を建て直したときに敷地を整理し直したこともあり、それらをすべて処分せねばなりませんでした。

柿の木は、私が生まれるずっと前から植えてあつたものです。昔の農家では凶作に備えて柿の木を植えていたと聞いています。

この柿の実がなると、母がむいて夕食後に出してくれて、甘くておいしく、最初は、喜んで食べていました。

でも、ある時、その柿の木に大きなヘビがいたのを見てから、そのヘビが怖くて、自宅の柿が食べられなくなりました。母に理由を言うと「もつたいない」と叱られました。

梅の木も見事な花を咲かせ、知らない人が写真を撮りに来ていました。残すのは無理だとは聞いていたものの、とても寂しくなりました。

（昭和三十八年生まれ）

町とかかわりのある植物

町の木・町の花 一九八二

(昭和五十七)年、町制施行二十周年記念事業の一環として、町民の緑化に対する認識を高めるため、「町の木」と「町の花」が公募によって決められた。

その結果、町の木には「もくせい」、町の花には「さくら」が選ばれた。『広報おぐち』昭和五十七年三月号に掲載された集計結果は、1-2-51のとおりである。なお、「もくせい」は、「キンモクセイ」(1-2-52)をさす。



1-2-52 キンモクセイ

町の木・町の花の応募結果

●町の木

応募総数 (有効) …	2,245
もくせい……………	939
もみじ……………	571
くろがねもち……………	356
かなめもち……………	230
もっこく……………	149

●町の花

応募総数 (有効) …	2,252
さくら……………	1,374
さざんか……………	332
さつき……………	303
おうばい……………	123
きく……………	120

1-2-51 町の木・町の花の応募結果

区の木の新制定 二〇〇二(平成十四)年は、町制四十周年の記念の年であり、六月に記念花としてマリーゴールドを制定した。

そして、同年に「区の木」も制定し(1-2-53)、十一月二日の町制四十周年記念式典で各区の木を発表した。

●秋田	花水木 (秋田学共に植樹)
●豊田	南天 (豊田学共)
●大屋敷	エリカ (大屋敷学共)
●外坪	花水木 (外坪学共)
●河北	檉木 (神明社)
●余野	錦木 (余野中央公園)
●上小口	こぶし (上小口学共)
●中小口	山柿 (小口神社)
●下小口	紅葉 (白山社)
●さつきヶ丘	花水木 (集会場(現さつきヶ丘防災センター))

1-2-53 各区の木 (2002年当時)